

「豊臣の天下統一」(「豊臣大研究」第5～8回)

第8回 果てしない統一と朝鮮出兵

2026/7/25 黒嶋敏(東京大学史料編纂所)

はじめに

- ・豊臣政権の「天下統一」を支えた大名統制の基本パターン
 - ・大名の恭順→政権の構成メンバー入り→主従関係の強化→領国の転封(遠隔地へ)
 - ・武力を背景に「自力」の世界の否定(豊臣政権による法・支配体制の整備)
- ・その豊臣政権が、なぜ朝鮮出兵に突き進んでしまったのか?
- ・政権の特質と、アジア情勢を合わせながら考えてみたい。

Ⅱ 遠征の開始と行き詰まり

- ・朝鮮出兵の原因をめぐって
 - ・従來說…勘合貿易復活説、領土拡張説、秀吉の個性 etc.)
 - 根幹には政権の武威、日本の華夷思想
 - ※長期に及んだ戦争の場合、戦況に応じて戦争の原因・目的も変化しやすい。
 - ・経緯

1587 年 秀吉、対馬宗氏に朝鮮国王の服属を指示(←九州平定)

1590 年 朝鮮使節来日

これを秀吉は朝鮮国王の「出仕」とし、「唐入り」
従軍を命じる(史料1)
(「天下なひきしたかふ大君に はこふ御調を
すむ高麗人」)

1591 年 秀吉、関白職を秀次に譲り自身は「太閤」
となる。名護屋築城。

朝鮮に「征明」協力を要求

→宗氏は「仮途入明」として要求→拒絶

1592 年 1 月～、朝鮮出兵開始(文禄の役・壬辰倭乱)

秀吉は 3/1 に出陣予定

(→眼病で延期され、秀吉の名護屋着は 4/25)

先発隊は釜山を攻略。さらに北上し緒戦は優勢に

(朝鮮王府の内部分裂→後手に回る対策)

漢城の陥落→日本勢は朝鮮半島北部へ

↓

- ・漢城陥落の報告を受けた秀吉
 - 唐入りの具体化計画を都に発信(史料2)
- ・秀吉は今月中に漢城、今年中に北京、やがて寧波
(日本の船着き)に入る計画

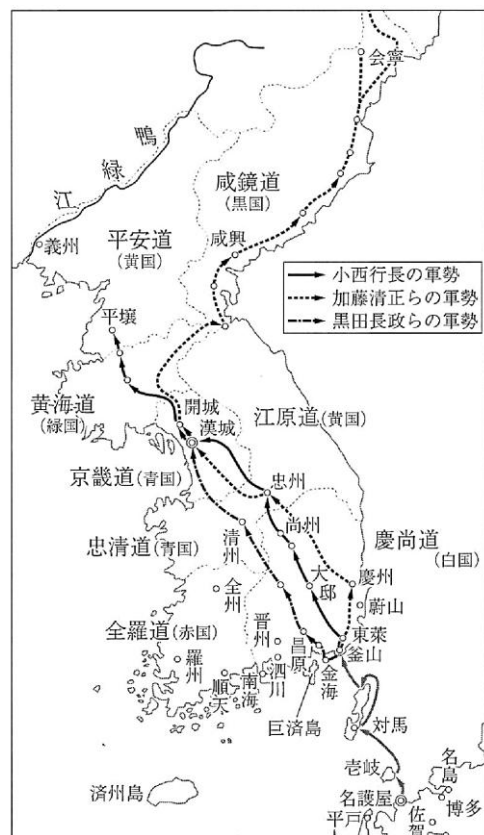


図 36 文禄の役関係図

(中野等 2008 より)

- ・秀次…来年初に渡海し大唐の関白に（天皇は後陽成天皇）→日本の天皇・関白を移す。
- ・日本…天皇は良仁 or 智仁、関白は羽柴秀保 or 宇喜多秀家
- ・朝鮮…留守居を置く（将来は朝鮮国王の王子に？）

↓

行き詰まる「唐入り」

- ・朝鮮半島南部では、李舜臣の率いる水軍が日本勢の船手を撃破（制海権の喪失）
→秀吉の渡海も中止（名目上は延期）
- ・明との停戦交渉を開始。秀吉側の発言（史料3）。
※海賊停止令（1588 年）の対外的な意味

12 「日本国王」と再出兵

- ・名誉ある停戦…秀吉の武威の落としどころを探る和議交渉
（条件：明皇帝の女子を天皇の后に、日明交易の再開、朝鮮には北半分だけ返還 etc.）
- ・1596 年 8 月、明使節が来日し秀吉を日本国王に冊封
 - ・明の万暦帝から勅諭・金印・冠服の下賜
 - ・冠服は明の「郡王」ランク（室町幕府将軍の「親王」ランクから格下げ）
 - ・秀吉はそれを押し戴き「万歳」と唱える（＝秀吉は激怒せず）

明の官職	氏名
日本国王	豊臣秀吉
右都督(正一品)	徳川家康
都督同知(従一品)	前田利家、宇喜多秀家、毛利輝元、豊臣秀保、小早川隆景、上杉景勝、増田長盛
都督僉事(正二品)	石田三成、大谷吉継、前田玄以、長束正家、施薬院全宗、小西如清、石田正澄、小西行長

表1) 秀吉冊封時のリスト(1595.1.21の万暦帝詔書による)

(黒嶋 2015 を改変)

- ・「日本国王」の意味…明と、傘下にある諸外国に対しての公的な外交名義
 - ・室町幕府から豊臣政権への交代…新政権が国際的に承認されるかどうか
 - ・以後、秀吉の肖像は、烏紗帽を着けて描かれる。
 - ・有力大名にも明の官職・官服が授けられ、栄誉の品として大切に保管される。
- 天下人の「日本国王」冊封が慶事であったことは間違いない

↓

- ・秀吉はどこで激怒したのか
- ・冊封の翌日（9/2）…明使、朝鮮における倭城破却と軍勢の撤退を要求
→秀吉側が態度を急変！
- ・王子を同行しなかった朝鮮使節の「無礼」を糾弾、和議破綻へ。
- ・1597 年春 西国の諸大名に朝鮮渡海を命じる（慶長の役、丁酉倭乱）
 - ・朝鮮南部を領土として確保し、倭城を軍事拠点として本格整備
 - ・朝鮮の支配者層は殲滅し、鼻（首のカウントの簡便化）秀吉のもとへ（→方広寺で供養）
- ・1598 年 博多への築城計画を掲げ、大規模派兵を準備
同年夏より秀吉の病状悪化→8/18 没（62 歳）→五大老らの主導で撤兵へ

おわりに

・朝鮮出兵…

豊臣政権を消耗させ、衰退する要因の一つとなった。

・出兵は止められたのか？

・豊臣政権の「武威」の構造

・豊臣政権の反省と、そこから学んだ家康

↓

・秀吉という強力なカリスマによって急ピッチで作上げられた豊臣政権。

・これが日本史の中でも特殊な時期であったことは間違いない。

・その到達点や内実、プラス・マイナスの影響は、さらに見つめなおしていく必要があるだろう。

年	季節	島津義久	島津義弘	島津忠恒	伊達政宗	上杉景勝	加藤清正
1591	春	○	●	○	●	●	○
1591	夏	○	●	○	○	●	●
1591	秋	○	●	○	○	○	○
1591	冬	○	●	○	○	○	◆
1592	春	○	○	○	○	○	●
1592	夏	◆	◆	○	◆	◆	▲
1592	秋	○	▲	○	◆	◆	▲
1592	冬	○	▲	○	◆	◆	▲
1593	春	●	▲	○	◆	◆	▲
1593	夏	●	▲	○	▲	◆	▲
1593	秋	●	▲	○	▲	▲	▲
1593	冬	●	▲	●	●	●	▲
1594	春	●	▲	●	●	○	▲
1594	夏	●	▲	●	●	●	▲
1594	秋	●	▲	◆	●	●	▲
1594	冬	●	▲	▲	●	●	▲
1595	春	●	▲	▲	●	●	▲
1595	夏	●	●	▲	○	○	▲
1595	秋	●	○	▲	○	●	▲
1595	冬	○	○	▲	●	●	▲
1596	春	○	●	▲	●	●	▲
1596	夏	○	●	▲	●	●	▲
1596	秋	○	●	▲	●	●	●
1596	冬	○	●	▲	●	●	○
1597	春	○	●	▲	●	●	▲
1597	夏	●	◆	▲	●	●	▲
1597	秋	●	▲	▲	●	●	▲
1597	冬	●	▲	▲	●	●	▲
1598	春	●	▲	▲	●	●	▲
1598	夏	●	▲	▲	●	○	▲
1598	秋	●	▲	▲	●	○	▲
1598	冬	●	●	●	●	●	●
1599	春	●	●	●	●	●	●
1599	夏	○	●	○	●	●	○
1599	秋	○	●	○	●	○	○
1599	冬	○	●	○	●	○	○
1600	春	○	●	○	●	○	●
1600	夏	○	●	○	●	○	○
1600	秋	○	●	○	○	○	○
1600	冬	○	○	○	○	○	○
1601	春	○	○	○	○	○	○
1601	夏	○	○	○	○	○	○
1601	秋	○	○	○	○	○	○
1601	冬	○	○	○	○	○	○
1602	春	○	○	○	○	○	○
1602	夏	○	○	○	○	○	○
1602	秋	○	○	○	○	○	○
1602	冬	○	○	○	○	○	○
1603	春	○	○	○	○	○	○
1603	夏	○	○	○	○	○	○
1603	秋	○	○	○	○	○	○
1603	冬	○	○	○	○	○	○
1604	春	○	○	○	○	○	○
1604	夏	○	○	○	○	○	○
1604	秋	○	○	○	○	○	○
1604	冬	○	○	○	○	○	○
1605	春	○	○	○	○	○	○
1605	夏	○	○	○	○	○	○
1605	秋	○	○	○	○	○	○
1605	冬	○	○	○	○	○	○
1606	春	○	○	○	○	○	○
1606	夏	○	○	○	○	○	○
1606	秋	○	○	○	○	○	○
1606	冬	○	○	○	○	○	○
1607	春	○	○	○	○	○	○
1607	夏	○	○	○	○	○	○
1607	秋	○	○	○	○	○	○
1607	冬	○	○	○	○	○	○
1608	春	○	○	○	○	○	○
1608	夏	○	○	○	○	○	○
1608	秋	○	○	○	○	○	○
1608	冬	○	○	○	○	○	○
1609	春	○	○	○	○	○	○
1609	夏	○	○	○	○	○	○
1609	秋	○	○	○	○	○	○
1609	冬	○	○	○	○	○	○
1610	春	○	○	○	○	○	○
1610	夏	○	○	○	○	○	○
1610	秋	○	○	○	○	○	○
1610	冬	○	○	○	○	○	○

表4 諸大名の居所

凡例：国元…○、上方(大坂・京都・伏見)…●、名護屋…◆、朝鮮…▲、江戸・駿府…★
季節は旧暦で春(1~3月)、夏(4~6月)、秋(7~9月)、冬(10~12月)とした(閏月も含む)。

[藤井編2011][山本1990][大浪ほか2015]を参照した。一部推測を含む。

(黒嶋 2015 より)

【おもな参考文献】

入間田宣夫・豊見山和行 2002 年『日本の中世5 北の平泉、南の琉球』中央公論新社

大阪城天守閣 2019 年『豊臣外交』(同館特別展図録)

北島万治 1990 年『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房

黒嶋 敏 2015 年『天下統一 秀吉から家康へ』講談社(現代新書)

トビ、ロナルド 2008 年『日本の歴史9「鎖国」という外交』小学館

中野 等 2008 年『文禄・慶長の役』吉川弘文館

藤井譲治 2011 年『日本近世の歴史1 天下人の時代』吉川弘文館

村井章介 2012 年『世界史のなかの戦国日本』筑摩書房

2013 年『NHKさかのぼり日本史外交篇6 戦国 富と野望の外交戦略』NHK出版

米谷 均 2014 年「豊臣秀吉の「日本国王」冊封の意義」山本博文ほか編『豊臣政権の正体』柏書房

史料1 天正十八年(一五九〇)十一月付、豊臣秀吉書契案

〔近衛家文書〕『豊臣秀吉文書集』三五〇六号)

日本国関白秀吉、書を朝鮮国王閣下に奉る、(中略)予、大明に入るの日、士卒を將いて軍営に臨まば、則ち弥よ隣盟を修むべきなり、予が願は他に無し、只だ佳名を三国に顕わさんのみ、

【大意】

日本国の関白である豊臣秀吉から、書契を朝鮮国王様にお送りします。

(中略)私が大明国に進出する時に、朝鮮国王が軍隊を將いて私のもとに参陣すれば、まさに両国の固い絆の証となるであろう。私の願いは他でもない、ただ自分の名を三国(日・明・朝)の歴史に残すことにある。

史料2 豊臣秀吉覚書写

〔古蹟文徴〕前田家文書『豊臣秀吉文書集』四〇九七号)

覚

(中略)

一、高麗都者去二日落去候、然間、弥急度被成御渡海、此度大明国迄茂不残被仰付、大唐之関白職可被成御渡候。

(中略)

一、大唐都へ(後賜成天皇) 叡慮うつし可申候、可有其御用意候、明後年可為行幸

候、然者都廻之國十ヶ国、可進上之候、其内にて諸公家衆何も知行可被仰付候、(中略)

一、大唐関白、如右被仰候、秀次江可被為讓候、然者都之廻百ヶ国可被成御渡候、日本関白ハ大和中納言・備前宰相兩人之内、(豊臣秀保) 覚悟次第可被仰

出事、

一、日本帝位之儀、若宮、(皇弟、智仁親王) 八条殿、何にても可被相究事、

一、高麗之儀者、(羽柴秀勝) 岐阜宰相歟、不然者備前宰相可被置候、然者丹波中納言(小早川秀秋)

ハ九州ニ可被置候事、

一、晨旦国江叡慮被為成候路次、例式行幸之可為儀式候、御泊々、今度御出陣道路、御座所可然候、人足、伝馬ハ国限ニ可申付事。

一、高麗国・大明までも、御手間不入被仰付候、上下迷惑之儀、少も無之候間、下々逃走事も有ましく候条、諸国へ遣候奉行共召返、陣用意可申付事、

(中略)

右条々、被仰含西尾豊後守候之条、可被得其意候也、

天正式十

五月十八日

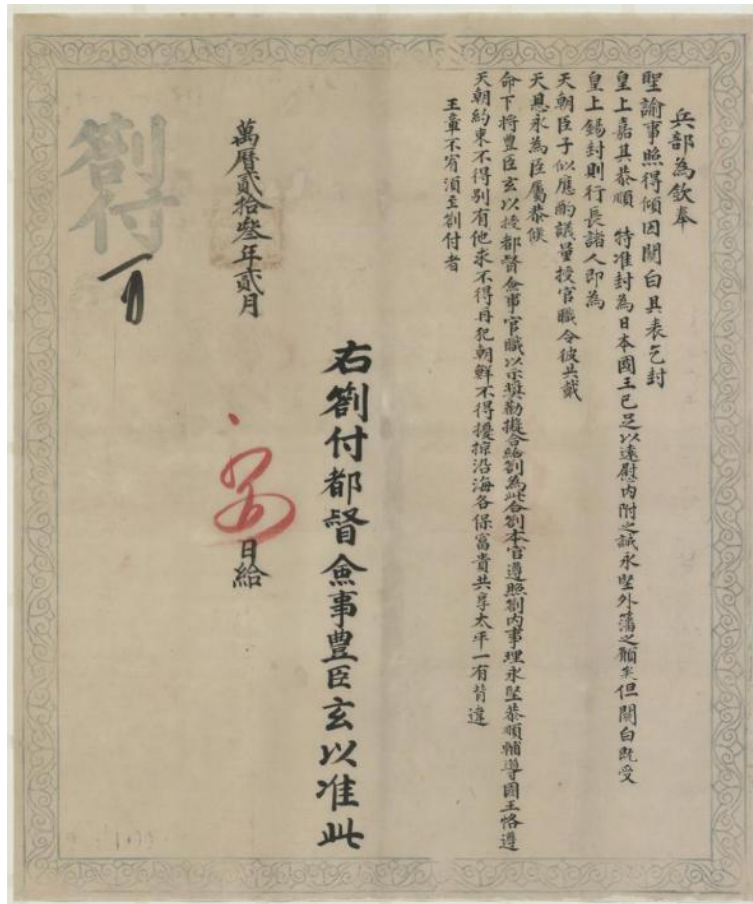
秀吉 朱印

関白殿(豊臣秀吉)

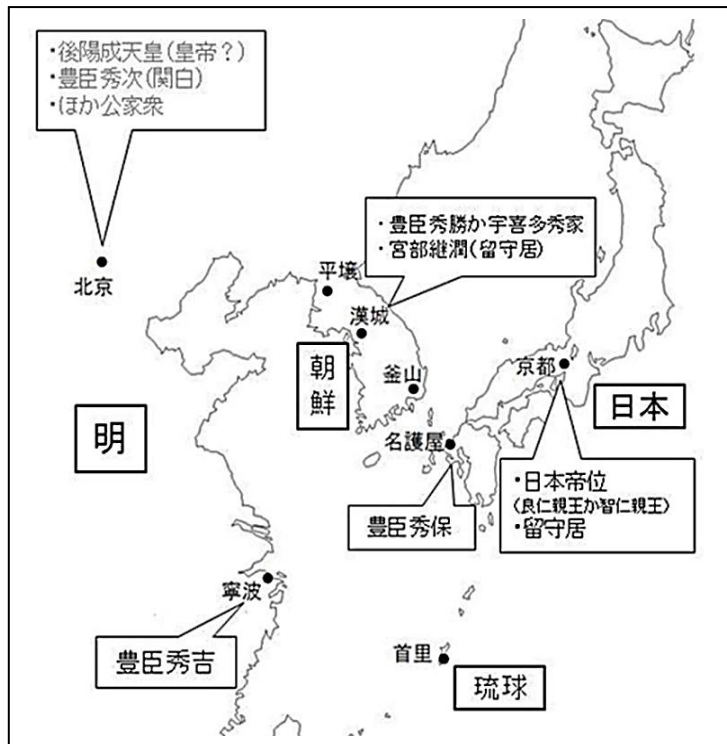
史料3 文禄二年六月二十八日付、豊臣秀吉朱印状写

〔善隣国宝記〕続善隣国宝記三九号、読み下し)

(中略)日本の賊船、年来大明国に入り、処々に横行し、寇を成す(中略)、既にして遠島辺陲も海路平穩にして、通貫に障礙なく之を制禁す、大明亦希む所に非ざるか、何の故に謝詞を伸べざるや、蓋し、吾が朝は小国なり、之を軽んじ之を侮るか、故を以て兵を將いて大明を征せんと欲す、



明国割付 (万曆二十三年二月四日 前田玄以宛)
(東京大学史料編纂所蔵)



秀吉のアジア国割構想 (黒嶋 2015 より)



豊臣秀吉陣立書
慶長二年二月廿一日
(東京大学史料編纂所蔵)